

やまのべ 偉人伝心 (安達峰一郎編)

5. 半年で教員助手を辞任し法律を学びはじめた安達峰一郎

●法学を志す動機(2)

安達博士は明治17年、15歳のとき、法律を学ぶために上京しました。その動機の一つとなったと思われる『関山新道事件』を前回述べましたが、当時はほかにも法学を志す動機となるような世の中の動きがありました。

それは、日本全国にわき起こっていた自由民権運動です。この運動は、当時の明治政府が江戸幕府を打ち倒した薩摩や長州の士族たちにより政治の実権をにぎられ、藩閥政治（薩摩や長州出身者による独占的政治）を行っていたので、これに対し国会を開いて全国の国民によって選ばれた人たちによる政治を行うべきであると主張した運動です。この運動は山形県内にも広がり、村山・置賜・庄内に多くの政治結社（政党のような団体）ができ、各地で数多くの演説会が開かれ、国会開設を訴えました。

山野辺村でも明治14年11月1日、西岸寺に6人の弁士が訪れ演説会が開かれています。このときどんな人が何人くらい集まったのかは不明ですが、『関山新道事件』の件もあったので、おそらく峰一郎も聞きに行ったのではないかと思います。同年、山形（現在の山形市）で28回もの演説会が開かれています。

また、全国に広がった自由民権運動におされ、この年の10月には政府から、10年後の明治23年に国会を開設するという詔勅（天皇の発した文書）が出されました。峰一郎は、このような世の中の新しい動きに強い影響を受け、一層法学への向学心を燃えさせたのではないかと思います。

さて、同年の1月、山形新聞に山形七日町で『法律学社』（塾）を開き、学ぶ者を募集するという広告が出されています。これが峰一郎が山野辺学校の教員助手を辞めるきっかけと考えられます。安達博士は高沢佐徳を恩師と仰いでいることから、この塾に入り、設立に関わった一人である高沢から法律の手ほどきを受けたのではないのでしょうか。高沢は後にこの塾を『法律学館』と改め、館主となっています。

高沢は、元天童藩の士族で、山形で代言人（弁

護士）をしていました。さらに安達博士は後に娘の鏡子と結婚しますが、当時士族の娘を平民（安達家）に嫁がせることなど考えられない時代でした。塾で優秀な峰一郎に出会ったことが、娘を嫁がせる絆にもなったと思われます。

●中学師範へ進学

この塾は長くは続きませんでした。峰一郎は同年9月に、県が中学校を開設するため教師を養成する『山形県中学師範学予備科』の入学生を募集していたので、これに応募して合格し、官費生（授業料を納めなくてもよい学生）として入学しました。

外国語をうまく発音できなかった峰一郎が、馬見ヶ崎河原で小石を口に含んで発音の練習したといわれるエピソードは、この学校で英語を学んだこの頃のことだと思われます。また、この頃同校に初めて法制経済という科目が設けられたので、一層法学を学ぶ刺激を受けたとみられます。しかし、同校は県の方針の転換により、わずか2年ほどで廃校になってしまいました。このとき安達博士と同級生だった人は、「英才の多いなかで、安達峰一郎君は、2年間断然頭角を抜いていた。」と話していたそうです。

こうして安達博士は、明治初期の激動のなかで、曲折を経ながらも、世の中の進む方向を見定め、法学を志し、一大飛躍を目指して上京するのです。文：山辺町ふるさと資料館長 佐藤継雄
参考図書：

『山邊郷』第三号 山辺町郷土史研究会 2001年刊
『六稜の青春』渡辺宏著 中央企画社 1972年刊



若いころに友人と3人で撮った写真(向かって左が峰一郎)